

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720041

研究課題名(和文)レコンキスタ期イベリア半島のキリスト教写本芸術と異文化交渉に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Christian Illuminated Manuscripts and Cultural Interaction in the Iberian Peninsula during the Reconquista

研究代表者

久米 順子(KUME, Junko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：60570645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、レコンキスタ期(711-1492年)のイベリア半島北部のキリスト教圏の美術、とりわけ写本芸術を中心に扱った。イスラーム、ユダヤ教といった異宗教のみならず、ローマ教皇庁やフランス由来の修道士たちも、同じキリスト教徒(カトリック)とはいえある時点まで異なる典礼や文字を用いており、ときに半島のキリスト教諸王国と政治的意図が対立したことなどから、同地の異文化交渉はきわめて複雑な様相を呈したことを事例研究を通して分析した。

また、研究方法に関して、非欧米圏でかつ西欧中世研究が行われている中南米の研究者らと一定程度、問題点を共有し得ることがコロキウムへの参加などを通して確認された。

研究成果の概要(英文)：This project has dealt with the Christian Art of the North of the Iberian Peninsula during the Reconquista (711-1492), with a special focus on the Illuminated Manuscripts.

Regarding the context, it is well known the phenomenon called "coexistence" among Christians, Muslims and Jews in this area and time. Moreover, it should be also emphasized the political, ritual and cultural intervention of the Papacy and the monks of french origin; the hispanic christians used their own Mozarabic Rite and the Visigothic Script until the 11-12th century. The complex aspects of cultural interaction are explained in each one of the case studies.

On the other hand, through the participation in a colloquium and personal contacts, it was confirmed that some problems that we japanese face on our research activities can be common, to a certain extent, with those of the Latin American researchers, because they also investigate the European Medieval themes with a wide geographical and psychological distance.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：装飾写本 中世キリスト教美術 スペイン レコンキスタ 写本学

1. 研究開始当初の背景

1980年代までのスペイン中世キリスト教美術史では、概して711年にイベリア半島に侵入したイスラームの影響が強調される傾向にあった。中世後期以降は、商業的に重要な役割を果たしたユダヤ人の美術も注目を集めた。イスラームもユダヤ人も1492年にイベリア半島のキリスト教王国から放逐されることとなるが、その過程であるレコンキスタ(対イスラーム国土回復運動、再征服戦争)は、ときに研究者自身の出自や信仰などにも左右されて、「宗教的理念による聖戦」あるいは「寛容の精神に基づく三宗教の共存」といったまったく異なる観点から、しかしどちらにしてもスペイン美術の特殊性を生み出した第一の要因として語られてきた。

ところがスペインがEUに加盟する前後の1980年代後半からは、特にスペイン国内の研究者の間で、スペインの独自性よりもむしろ他のヨーロッパ諸国との共通点の探索を重視する傾向が顕著となってきている。これには、EU内の学术交流の推進にともない、周辺諸国の研究機関との共同プロジェクトなどが国内外での競争的資金の獲得に有利に働くという研究環境上の理由もあるだろうが、前の世代の研究姿勢に対する意識的あるいは無意識的な反撥も作用しているように思われる。

実際には、中世のイベリア半島には、イスラーム、ユダヤ人といった異宗教のみならず、同じキリスト教徒(カトリック)ではあってもある時点まで異なる典礼を用いていたローマ教皇庁やフランス由来の修道士たちなど、さまざまな文化的・宗教的背景をもつ人間が到来していた。

申請者は、そうした異文化との干渉の問題を冷静に整理し、分析する視点が、現在のスペイン中世美術研究に必要なのではないかと考える。そこで本研究では、申請者がスペインから地理的にも文化的にも遠く離れているという現状を、むしろ政治的宗教的偏見ないし先入観に左右されにくいという観点から肯定的に捉え、スペイン中世のキリスト教美術の全体的展望を見直すための土台を得ることを目的としたい。

2. 研究の目的

本研究は、イベリア半島で711年から1492年にかけて行われたレコンキスタ(対イスラーム国土回復運動、再征服戦争)の時期に制作されたキリスト教圏の写本芸術を対象として、イスラーム、ユダヤ教、ローマ教皇庁やフランス由来のクリュニー会など半島内外の「異文化」との接触・影響関係に関する調査を行い、美術の分野における異文化交渉の具体的様相を明らかにしようとするものである。

本研究が対象とするのは、装飾写本である。写本という分野に注目するのは、

(1) 現存作例が他の美術作品に比して多く、

(2) 制作年代が比較的短期間で済む上に持ち運びが簡便であるところから異なる文化圏との往来が盛んで、

(3) 写本挿絵が彫刻や壁画のモデルとなるなど他の美術に対する影響力が大きかったと考えられるためである。

そこでレコンキスタ期のキリスト教スペインで異文化の影響を受けて制作されたり、異文化圏からもたらされて受容されたことが明らかな写本を中心に扱う。

しかし、ひとくちに「異文化受容」や「異文化交渉」といってもその意味するところはきわめて幅広い。便宜上、美術において異文化と接触し、それを受け入れたり反発したりして新たな図像や様式が生まれるプロセスを、

(1) 注文主・制作者といった人的移動が契機となるもの、

(2) 作品自体の移動が契機となるもの、

(3) 思想・文学(テキスト)の伝播による間接的異文化受容

の三つに分けて考察したい。

個別の事例研究を積み重ね、レコンキスタ期における異文化交渉の具体的な様相と、そこから生まれた写本芸術の造形的特質を浮かび上がらせることが本研究の目標となる。

3. 研究の方法

711-1492年のレコンキスタ期の写本芸術に関して、まずは先行研究の渉猟によって、人的移動、作品の移動、テキストの伝播といった異文化交渉に関連する作品の基本データの収集に努める。写本の制作法や書体、挿絵の図像や様式、レイアウト、テキストとの関係といった美術史学および写本学的観点に着目しながら装飾写本の分析を行う。

ところで、本研究課題を遂行するうえで直面しうる問題点としては、

(1) 遠隔地にいることに起因する、文献や写本の複写の入手上の困難

(2) 中世学研究の主流である欧米の学会での流行や潮流に対するアプローチの方法、またそれらを即中世スペイン研究に適用することの是非

(3) スペインや欧米の研究者が提案する中世スペイン像と自分の抱く像が乖離する場合、それをどのように発信していくか(研究成果を公表する際の言語の問題を含めて)

などが考えられる。これらには、スペインを含めた欧米圏の研究者とは共有しがたいものも含まれる。そこで、これまでの研究を通して培った欧米圏の研究者とのネットワークを保ちつつも、新たに、非欧米圏にありながら中世研究の伝統を持つ中南米(メキシコ、

アルゼンチン、チリ)の研究者に注目し、彼らとの意見交換を通して研究方法についての問題点の解決をはかる。

4. 研究成果

(1) 注文主の関与が重大であった例として、スペインのキリスト教圏を代表するレオン＝カスティーリャ王国の初期ロマネスクを取り上げ、ヨーロッパからイベリア半島に新たにもたらされたロマネスク様式が王家の主導によって取り入れられた理由を、王家が政策的に主導した西ゴート・リヴァイヴァルとの関連から分析した(雑誌論文 および学会発表)。

(2) 博士論文に基づき、財団法人鹿島美術財団「美術に関する出版の援助金」を受けて、11世紀のイベリア半島のキリスト教写本芸術についてのモノグラフを刊行した(図書)。これは、特にローマやフランスからの文化的・宗教的・政治的影響がイベリア半島のラテン語装飾写本にどのように波及したかを、美術史上まだあまり知られていない写本を多数取り上げて論じたものである。本書によってキリスト教美術・音楽の若手研究者を対象とする2012年度第25回立教大学辻荘一・三浦アンナ記念学術奨励金をいただいた。

(3) トレド司教であった聖イルデフォンズスによる『聖母マリア童貞論』のテキストを擁する装飾写本2冊の研究を試みた。イスラーム支配下のトレドという異文化圏に身を置くキリスト教徒が制作した作例である1067年の《フィレンツェの聖母マリア童貞論》と、12世紀初頭にフランスのクリュニー会周辺で制作され、北スペインのレオン王アルフォンソ6世に贈られたと先行研究で見なされてきた《パルマの聖母マリア童貞論》は、基本的に同一のテキストに基づくにもかかわらず、その挿絵の図像と装飾プログラムには大きな相違がある。写本自体の移動を考慮に入れながら、イベリア半島の伝統に基づく図像とフランス起源の図像を比較するのによってつけの題材であったが、先行作例の少なさから図像学的源泉を同定するのが難しく、研究期間中に論文というかたちとしてまとまるには至らなかった(学会発表)。

(4) キリスト教圏とイスラームとの異文化交渉について。レコンキスタ期を通じてイベリア半島を中心に写され続けた修道士リエバナのベアトゥスによるヨハネ黙示録註解写本の挿絵を取り上げ、その図像学的分析などを通して、キリスト教徒が抱いていたと思われるイスラーム像とその変遷を概観した(図書)。また装飾写本に限定せず、年代順に重要な美術・建築作例とテーマを追う口頭発表を行った(学会発表)。

(5) 研究方法の面では、メキシコでの国際コロキウム「異なる視野から見たヨーロッパ中世：理論と方法論の諸問題」に参加し、西欧から地理的・文化的に遠隔の地で西欧中世を研究する意味、その利点と研究の限界、史料入手の困難など実際的な問題点とその解決法などについて南米の研究者たちと議論を行った。今後の研究の方法や方向性について、多くの示唆を得ることができた(学会発表)。

これをまとめて、非欧米圏における西欧中世研究の一例として2014年6月開催予定の西洋中世学会全国大会にてポスター発表を行う予定である(発表申請受理済み)。また、2015年にアルゼンチンのマル・デ・ラ・プラタ大学で同コロキウムの第2回大会が開催される予定。

(6) その他、研究期間中に会った先行研究のなかから、本研究とも直接かかわる「レコンキスタ」という言説のスペイン歴史学研究における位置づけを分析した書物と、ローマ教皇庁やフランスのクリュニー会などイベリア半島外のキリスト教圏との接触のなかから誕生したサント・ドミンゴ・デ・シロス修道院の最新のモノグラフとを選び、日本の学会誌に新刊紹介を行った(雑誌論文)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

久米順子、新刊紹介(RÍOS SALOMA, M. F., *La Reconquista: una construcción historiográfica (siglos XVI-XIX)*, Madrid/México, 2011)、『西洋中世研究』、査読無、第5号(2013年)、190ページ

久米順子、新刊紹介(VALDEZ DEL ÁLAMO, E., *Palace of the Mind: The Cloister of Silos and Spanish Sculpture of the Twelfth Century*, Turnhout, Brepols, 2012)、『西洋中世研究』、査読無、第5号(2013年)、192-193ページ

久米順子、発表報告要旨「レオン＝カスティーリャの初期ロマネスク—王家のメセナの歴史的検証から」、『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』、査読無、第14号(2013年)、45ページ

久米順子「レオン王国への聖イシドルス聖遺物奉遷(1063年)再考」、『総合文化研究』(東京外国語大学総合文化研究所) 査読無、第16号、2012年、44-56ページ

[学会発表](計4件)

久米順子「キリスト教美術とイスラーム美術が交差するところ：中世スペインの場合」、早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ【研究エリア<比較文明史>】第8回シンポジウム（招待講演）、2013年6月29日、早稲田大学

Junko KUME, “Historia del Arte de la Edad Media Europea en Japón: problemas y perspectivas”, Coloquio internacional *La Edad Media desde otros horizontes: problemas teóricos y metodológicos* (招待講演)、2013年2月18日、Instituto de Investigaciones Históricas de la Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

久米順子「レオン＝カスティーリャの初期ロマネスク——王家のメセナの歴史的検証から」、スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会2012年度第2回研究会、2012年12月22日、早稲田大学

久米順子「聖イルデフォンズス『聖母マリア童貞論』写本の挿絵—11世紀後半のトレドのモサラベ写本とクリュニー周辺写本をめぐって」、新約聖書画像研究会(NTIS)第10回例会、2010年12月23日、立教大学

〔図書〕(計2件)

八尾師誠、千葉敏之、吉田ゆり子編著、久米順子他15名著、『画像史料論』(第2章「ベアトゥス写本挿絵にみる中世イベリア世界」を担当)、東京外国語大学出版会、2014年4月、326ページ(28-48ページを担当)

久米順子『11世紀イベリア半島の装飾写本—“モサラベ美術”からロマネスク美術へ—』中央公論美術出版、2012年11月、本文296ページ+カラー口絵48ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久米 順子 (KUME, Junko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：60570645